

18) 鼠径・大腿ヘルニアに対する Tension free mesh repair の検討

大川 卓也・福成 博幸
井ノ口幹人・数井 晶 (十日町病院) 外科
井石 秀明

対象：1996年3月より1998年1月までの23カ月間に当科にて行われた成人鼠径・大腿ヘルニア93例について検討した。男性74例，女性19例，年齢は33歳から87歳（平均66歳）であった。対象の内訳は，外鼠径ヘルニア61例，内鼠径ヘルニア23例，内外鼠径ヘルニア2例，大腿ヘルニア7例であった。そのうち再発ヘルニアは3例であった。

手術術式：大腿・鼠径ヘルニアとも鼠径管前壁を切開，ヘルニア嚢を低位結紮切除後内翻し Mesh Pulg を挿入する。さらに open onlay graft 法にて Mesh sheet を用い tension-free の後壁補強を作製する。

結果：手術時間は平均45分，最近10症例では34分であった。術後抗生剤使用期間は平均1.7日で，1996年11月より使用しておらず，また1997年3月より創包交もしていないが mesh の感染は認めていない。また術後の疼痛は軽く鎮痛剤の使用は手術当日か翌日までで，平均0.7回であった。術後退院までの期間は平均7.2日であったが，術後翌日の退院も可能と思われた。

考案：成人鼠径・大腿ヘルニア修復術は従来，Bassini 法，McVay 法，Iliopubic tract repair などが主流をしめていたが，鼠径管の後壁補強の際過度の緊張がかかり，組織の壊死，脆弱化を起し，高い再発率を呈していた。この問題に対して Mesh を用いた tension-free ヘルニア修復術の有用性が数々報告されてる。今回われわれも，鼠径・大腿ヘルニア93症例に対し Mesh を用いた Open tension-free ヘルニア修復術（onlay graft 法）を施行したが，この術式は手術手技が容易かつ手術時間が短く，術後疼痛や突っ張り感も少なく，また再発率も低く優れた術式であると思われた。

19) 西洋医学と東洋医学の接点

福田 稔 (二王子温泉病院)
宮沢しのぶ・安保 徹 (新潟大学) 医動物教室

気圧と虫垂炎の研究より発見された自律神経と疾病の理論は，浅見鉄男発見の刺絡法と合体することにより，今まで難病と言われている疾病に対してまでも，薬漬けになることもなく，外科的侵襲を加えることもなく，短

期間に治癒の状態にすることが証明された。そして西洋医学と言われるものは，思いあがりであり，力づくめの理論であると言わざるを得ない，悪性新生物，難病に対する薬漬け，切れば治ると言う理論は本来人間が持っている生体防御の力を無視した医療法と言っても過言ではない。我々のこの理論と実践が人体実験と言われ，裁きを受けるならば現医療の実体を何と表現したら良いのだろうか。

20) 出血源不明の消化管出血後，脾梗塞を合併した慢性膵炎の一例

田中 孝幸・後藤 俊夫
関根 厚雄・八木 一芳 (県立吉田病院)

症例は49歳男性，日本酒一日2～3合。平成7年12月，左上腹部痛で一回目の入院。腹部 CT では膵尾部の腫大と尾部の仮性嚢胞を認め，ERCP では所見なく，急性膵炎の治療にて改善。平成9年4月，左上腹部痛，下血で二回目の入院。下血は入院の一カ月前に三日間持続。腹部 CT では膵の腫大，仮性嚢胞とも前回より軽快していたが，GIF，CF では出血源は確認できなかった。平成9年10月，左側腹部痛で三回目の入院。入院時，白血球増加，血清アミラーゼ，CPK の軽度上昇を認め，腹部 CT では仮性嚢胞の増大と脾梗塞が疑われ，ERCP では主膵管と仮性嚢胞との間に交通を認めた。腹部血管造影では脾動脈に途絶があり脾静脈は造影されなかった。これにより繰り返す慢性膵炎急性増悪により膵管内出血と脾梗塞を合併した症例と考えられた。

21) 胆管病変を伴った膵管狭細型慢性膵炎の一例

廣野 玄・黒岩 敬
夏井 正明・高橋 達
成澤林太郎・野本 実 (新潟大学) 第三内科
青柳 豊・朝倉 均

症例は78歳男性。'97年3月，黄疸を主訴に近医に入院。肝胆道系酵素の上昇と ERCP 上肝内胆管の不整狭窄硬化像を認め，胆管癌の疑いで5月当院外科へ転院。UDCA 投与で減黄傾向を示した経過と ERCP 等よりPSC を疑われ当科転科。血清 γ -gIb と血中尿中 Amy も高値を示し，6月末には新たに US，CT で膵頭体部にび慢性腫大を認めた。ERP では胆管病変類似の膵管のび慢性不整狭窄像を示し，7月にはさらに増悪した。腹腔鏡上胆汁うっ滞肝で，肝生検では小葉間胆管周囲の線維化，形質細胞主体の細胞浸潤及び細胆管破壊